

クラブを支えるボランティアは、 家族単位の活動から育まれます。

ボランティア型のクラブ活動で 5,000 人の卒業生を生んだ、
B & G 津屋崎海洋クラブ（福岡県） = 第 1 話 =

全国には行政主導による海洋クラブが少なくないが、福岡県の B & G 津屋崎海洋クラブはボランティアによる指導体制のもとで、さまざまな活動を展開しながら、これまでに 5,000 名を超える卒業生を輩出。こうした実績が高く評価され、クラブの代表を務める占部雄三さんは、地元小学校の正課授業で「ヨット部活動」を指導したり、福岡水産高校の「マリン科」授業を担当するなど、教育の現場へも精力的に関わってきた。

今回は、「クラブスポーツを語るうえで、ボランティア指導員は欠かせない存在です」と語る占部さんに、クラブスポーツの重要性とボランティア指導員を育む秘訣についてお聞きした。

次号では、教育の現場に出向くことになった経緯や、生涯スポーツに関する地域海洋センター/クラブの役割などについて語っていただく予定です。

キーワードは「家族単位」

占部雄三さんは、日本 OP 協会副会長を務めるなど、競技スポーツとしてのジュニアヨット選手育成に力を入れているが、その一方で地域に根ざしたクラブライフによるヨットの普及にも心血を注いでいる。占部さんの地元、B & G 津屋崎海洋クラブでは昔からボランティアによる指導が貫かれているが、これはごく自然にできた体制だという。「父母が子供たちのヨット指導に熱心なところとしては、前々から琵琶湖のジュニアヨットクラブが知られていました。ここは、戦前からヨットの歴史が育まれてきた



土地柄もあってヨット経験者の親が多く、我が子にもヨットを教えたいという流れができています。私たちのところでは、そのような歴史的背景はありませんが、親子でヨットに親しむという点については見習いたいと思いましたし、現実的に人手が足りなかったものですから、少しでも父母がクラブ運営を手伝ってくれたら助かると思ったのです」

直接的な呼び水は、親子ヨット教室を開いたことだった。親子で参加するというメニューを利用して、やってきた親たちに子供と一緒にクラブへ入ってもらおうよう勧めたのである。

「ジュニアのクラブですから、子供たちは上の学校へ行くと辞めてしまいます。最初は、きっと親たちも子供が辞めるのと同時に来なくなるだろうと思いましたが、驚くことに親たちは辞めようとはせず、新しく入ってきた子供の面倒を見ながら自分たちもヨットに乗り続けていました」

親たちに運営を手伝ってもらうだけでは申し訳ないと考えた占部さんは、子供用の OP ディンギーの他に、大人が乗れるシーホッパーを用意し、B & G 財団からも成人 2 名が乗れる 420 級ヨットを寄付してもらっていた。こうした、大人も楽しめる環境づくりが予想を超えた結果をもたらしたのだった。

「実は、大人たちも楽しみたいんですよ。そして、楽しんだ経験が身につけば、ボランティアで他人を指導することも苦にならなくなるし、楽しさを人に伝えたいという意識が芽生えてくるのです」

注目すべき海洋センターの存在

こうして始まった親子のクラブ活動は途切れることなく続き、ヨットだけでなく水泳やカヌーなどにも手を広げ、これまでに 5,000 名以上のクラブ卒業生を輩出。現在も、父母 6 名のボランティアが子供たちの面倒を見ている。

「親たちが、いろいろな海遊びを提案するようになりましたが、その際、B & G 海洋センターの艇庫や器財が活用できたのでたいへん助かりました。諸外国では、スポーツを楽しみたい人たちが労力と資金を出し合ってゴルフやテニスなどのクラブをつくっていますが、それに似た自発的な活動に向かうことができました。なにより、親子・家族で楽しむことからスタートしたのが良かったのだと思います」

占部さんは、クラブスポーツの原点は楽しむことにあると力説する。その裾

野の広がりの中で、才能に秀でた人材が出てきたら、国や選手協会がバックアップしてあげれば良いと言う。

「とかく日本では、スポーツと言えは先鋭的な方向を目指しがちで、クラブといっても学校や企業の競技クラブを意味することが多いと思います。しかし、親子や家族で楽しむ地域のクラブが底辺を担っている国も多いのです」

ニュージーランドへ視察に行ったときは、親子でヨットを楽しむクラブライフを目の当たりにして、オリンピックメダリストを何人も生んだ国の底力を痛感したという。

「同じような光景が日本の至るところで見られるようになるためには、行政の理解が欠かせませんし、なにより器材や施設が必要です。そのことを考えた場合、各自治体が管理・運営しているB & G海洋センターの存在は貴重です」

同好の士が集まって施設や器材を揃えとなれば、多くの時間や資金が必要になってくるが、地域の海洋センターを活用すれば、B & G津屋崎海洋クラブのような活動が比較的容易に行える。全国約 480 カ所の海洋センターをより活性化させるためには、B & Gコンパスや E メールを使ってどんどん情報を交換し合いながら、より良い方向性を模索していくべきだと占部さんは提案してくれた。

次号へ続く



地域海洋センターはクラブライフを実現するうえでの強い味方になる（左）

B & G津屋崎海洋クラブの活動を支える艇庫の豊富な器材（右）

占部さんへ、一問一答

活動が沈滞化している海洋クラブへ、一言アドバイスするとしたら。

マリンスポーツが盛んにならない根底には、これまで多くの方が海を産業優先で考えてきたことが挙げられます。しかし時代は大きく変化しつつあり、最近では漁港の一部にマリナーを併設するような動きも出てきました。一般的な物の見方が変わってきたことは追い風であり、地道に輪を広げていけば、こうした考え方の変化が拡大していくと思います。

クラブでイベントを企画しても、なかなか自治体が動いてくれない場合があります。

表向き、行政は「どんどんイベントをしてください」と賛同してくれますが、話を現場レベルへ持っていくと「時間がない」などと否定的な意見を言われてしまいがちです。確かにマリンスポーツのイベントは大掛かりとなり、彼らにしてみれば大きな負担です。しかし、何もかも行政にしてもらわなくても良いわけで、「これとこれは、私たちのクラブが責任持ってやります」と自主性を強く打ち出し、話し合いのなかでイベントを開催するうえでの障害を1つ1つ解決していくことが大切だと思います。

海洋センター間の情報交換で、具体的にどんな成果が期待できますか。

艇庫がない山間の海洋センター/クラブの人たちを、海辺の海洋センター/クラブが遊びに招く知らせを流すだけでも、交流の大きな効果が得られます。B & G津屋崎海洋クラブの浜は、遠浅で海水浴やキャンプ、バーベキューなどに適しているので、毎年、いろいろな海洋センター/クラブに遊びに来るよう声を掛けています。こうした企画は、多くのところが行っていると思いますが、これまでそれは自主的、単独的なものだったと思います。しかし、今後はB & Gコンパスを活用して、より幅広いネットワークで声を掛け合うことができるようになります。ちなみに、毎年、B & G津屋崎海洋クラブに遊びにやってくるクラブがあって、いつも行政の担当者が子供たちに付き添って来ていましたが、去年は子供の親たちが付き添ってきました。これは、クラブ間で交流が進んできた証拠であり、まさに家族ぐるみで楽しむクラブライフの原点が育まれていることを物語っています。



交流を通じて友情を育むことがクラブライフを発展させる原点になる